

前年度（2025年度）評価結果からの変化など（トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群）

ポイント

- 近年、0～3歳魚の漁獲尾数が減少しているのに対し、4歳魚以上の漁獲尾数は安定しており、2025年漁期も4歳魚以上は例年通り漁獲された（図1）。
- その結果、本年度評価では、2021年級群以前の加入量（0歳時の資源尾数）が上方修正されたため（図2a）、それらの年級群が親魚となる近年および近い将来の親魚量も大きく上昇した（図2b）
- 本系群については、親魚量は高い水準にあるのに対し、加入量は低い水準にあるが（図3）、この一因としては、成熟したにもかかわらず瀬戸内海を中心とする産卵場へ戻らない親魚が増えることによって、産み出される子供の数が減少した可能性が考えられている

データの更新（図1）

- 2025年漁期の0～3歳魚の漁獲尾数は過去最低
- 一方、4歳魚以上は2025年漁期も多く漁獲され、全漁獲尾数の51%を占めた

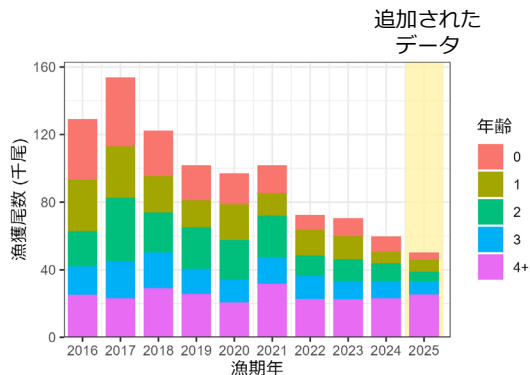


図1 年齢別漁獲尾数

その他の主な変化とその要因など

- 2025年漁期の評価結果を予測値から推定値に更新
- 2026・2027年漁期の予測漁獲量は大きく変化せず（図2c）
- 2025年漁期の0歳魚の漁獲尾数が過去最低であったため（図1）、2025年級群の加入量も本年度評価では過去最低と推定された（図2a）

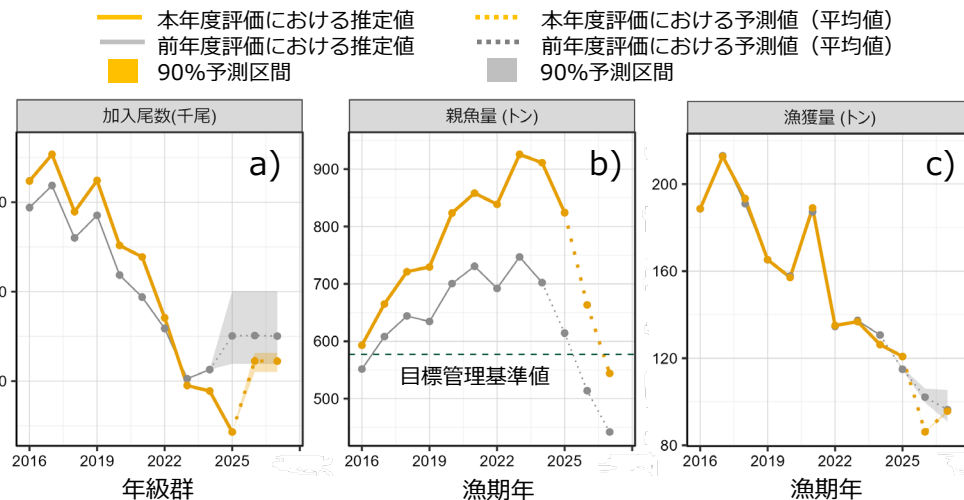


図2 本年度（2026年度）と前年度（2025年度）の評価結果

前年度評価における2025年漁期の漁獲量は近年の平均的な漁獲圧に基づき算出し、2026年漁期以降の漁獲量は $\beta = 0.7$ とした漁獲管理規則に基づき算出
本年度評価における2026年漁期の漁獲量は近年の平均的な漁獲圧に基づき算出し、2027年漁期の漁獲量は $\beta = 0.7$ とした漁獲管理規則に基づき算出

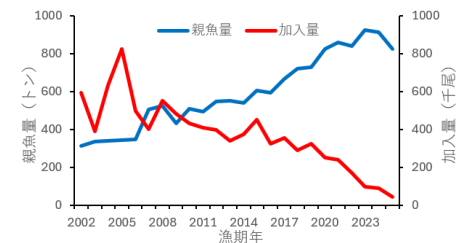


図3 親魚量と加入量